

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：11301  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2016～2019  
 課題番号：16K02260  
 研究課題名(和文) ネーデルラント美術にみる共感表現・スペクタクル・美術市場 レンブラントを中心に  
  
 研究課題名(英文) Empathic Expressions, Spectacles, and Art Market in the Dutch Art: Focusing on Rembrandt  
  
 研究代表者  
 尾崎 彰宏 (OZAKI, AKIHIRO)  
  
 東北大学・文学研究科・教授  
  
 研究者番号：80160844  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：15世紀のネーデルラント美術、とくにヤン・ファン・エイクの美術において象徴性や図像的な意味内容と並行して、聖書に語られない人物の動作や場面を描きこみ、観るものの情念をかきたてる感性的表現がファン・エイク以来、重要なファクターとして絵画の中で機能していたことが明らかになった。こうしたオランダ絵画が受容者(消費者)の手に届くようになるには、それまでとは比較にならないくらい美術市場の役割が重要になってくる。需給関係ばかりでなく、社会関係資本に立脚した広義の市場は、芸術家の自由を束縛することになるが、その一方で競争によって近代芸術家にとって最大級の価値ともいえる独創性を生みだす「場」となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
 レンブラント美術もとりネーデルラント美術は、感覚の変遷、モードの変化こそが第一義的だという姿勢に貫かれている。つまり、主題そのものに価値があるのではなく、その需要によって価値が生みだされてくる。これは本質を重視する古典主義に対する反逆である。いわば本質と属性の逆転に特徴があり、近代に先駆けている。つまり、同時代の価値観を逆転させている。レンブラントの作品の特質を別決するなら、「イノベーション」とは何かということが具体的に明示される。現代の転換期において喫緊の課題は、過去を踏襲することではなく、それをいかにチェンジしていくかということであり、本研究にはそのヒントを見出すことができる。

研究成果の概要(英文)：Netherlandish art in the 15th century, especially Jan van Eyck's art, depicts not only symbolism and iconographic meaning, but also the movements and scenes of people who do not appear in the Bible.

It became clear that the emotional expressions functioned in painting as an important factor. In order for these Dutch paintings to reach the recipients (consumers), the role of the art market becomes more important than ever before. The market in a broad sense based on social capital will restrain the freedom of the artist. On the other hand, however, competition has become a "place" that creates the greatest value of originality for modern artists.

Giving an example from Rembrandt. The relationship between Rembrandt and the customer is sometimes hard to understand. They often clashed with each other. Nevertheless, even after the bankruptcy, Rembrandt continued to be involved in important work. The scandal was a testament to Rembrandt's habit and originality.

研究分野：ネーデルラント絵画史

キーワード：レンブラント 美術市場 オランダ絵画 ネーデルラント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

#### z 1 . 研究開始当初の背景

『レンブラント絵画集成』(全6巻)が起爆剤となり、レンブラントと絵画市場に着目した研究が行われるようになり、アルパース『レンブラントの企業体』(1988年)や拙著『レンブラント工房』(1995年)が著された。申請者は、「レンブラント工房」には、絵画教育を推進する「教育の場としての工房」と営利目的の「企業体としての工房」の2つの顔があり、その両方の機能を統合させた点にレンブラントの新しさがあったことを明らかにした。そして、レンブラント作品ならびにそのコピーには、同じ主題であっても多くのヴァリエーションが存在するが、それは、作品に多様な変化があることで商品としての付加価値が付けられたことを論じた。さらに近年、美術市場に関する研究が盛んにおこなわれ、絵画を見る目を熟達させることが、絵画を愉しむ方法になったことが指摘されている。しかし、なお解決を要する課題が残されている。こうした絵画の機能の変化は、ファン・エイク兄弟が登場した15世紀のネーデルラント美術以来、ネーデルラント絵画には程度の差こそあれ、すでに始まっていた(尾崎、2015年)。絵画はもはや宗教的な礼拝の対象ではなく、美的対象となったのである。それは、17世紀だけの現象としてはなく、ネーデルラント美術の固有の歴史的特徴として、詳細に検討すべき課題である。

美術市場は、需要と供給からなる単純な仕組みではなく、画家と買手/鑑賞者/鑑定家とのあいだの共感関係/社会関係資本を成り立たせる「場」でもあった。その共感関係は、理性よりも感性に強く働きかけるスペクタクル的な機能を有していた(尾崎、2014)。そうした点を解明しようとするのが、研究に至った経緯である。

#### 2 . 研究の目的

本研究の主要な目的は、以下の5点に集約される。

(1) 宗教的な画像が、個人の救済を「得心する」メディアとして、どのように機能していたのか具体的に探りたい。

(2) 聖なるものと世俗なるものは対極にあるのではなく、この両者は、1枚の硬貨の裏表関係にあった。こうした問題関心から、イコノクラスムを挟む2つの時代の絵画の特質にみる共通性(スペクタクル性)を解明する。

(3) レンブラントの絵画は、鑑賞者自身がテキストに叙述されていない、登場人物の内的な「情動」をスペクタクルとして経験させる。鑑賞者は絵画から新たな価値を発見し、その人自身の経験に変えていったプロセスを検討する。

(4) レンブラント芸術の「名声の戦略」には「共感表現・スペクタクル・美術市場」の三位一体が、重要な役割を果たしていた。それを Hans Belting が提唱する「イメージの人類学」や David Freedberg の「イメージの力」も考慮に入れる。

(5) レンブラントの評価史をたどり、その芸術の戦略がどう理解されていたのか(誤解も含む)を探る。「名声の自己増殖」をはかったレンブラントの戦略を後世の批評家を鏡とすることで、その芸術の仕組みを逆照射し、「共感関係」重視という歴史的コンテクストに位置づける。

以上のような研究により、従来ネーデルラント美術研究における静物画研究では十分解明が進んでいなかった諸問題に新たな地平を提起できるはずだ。

#### 3 . 研究の方法

以下に挙げるような研究方法によって研究課題の解明を進めた。

(1) 写本やこれまであまり比較されなかった板絵などの断片的な絵画資料をあらためて精査すると、ファン・エイクに始まる15世紀ネーデルラント美術が、ファン・エイク以前

と比較する写実性という点で大きな違いのあることがわかる。つまり、その前の時代からの連続というよりも不連続性が際立つ。何が残されていて、何が欠けているのか、精密な調査からまとめられた本カタログを基本的な参考資料として、申請者は各国の美術館、図書館に点在している、未見の作品群の調査、同じく未見の資料を閲覧収集する。この過程で、ファン・エイク前後で美術表現の象徴性と写実性の関係がどう変化したのかを追跡する。つまり、静物モチーフは欄外に、象徴表現は中心部にというような写本表現が、写実性の大きな浸食にあって、写実表現の内側におさまるようになった(「偽装された象徴主義」)のか、あるいはもっとファンダメンタルな転回が起こったのか、社会史的あるいは Belting のような文化人類学的なアプローチも駆使し、実証的な再検証を行いながら、この断絶に**新たな「ストーリー」**(仮説)を立てるべく検討する。

(2)ネーデルラントにおける感性を重視する芸術表現は、写本から絵画という過程だけでなく、**版画という媒体**においてははっきりあらわれてくる。その中心的な役割をはたしたのが、ヒエロニムス・コックの「四方の風」だ。初めての包括的展覧会カタログ *Hieronimus Cock. The Renaissance in Print*, Leuven/Paris 2013. を手がかりに、**版画が聖・俗さまざま感情表現を広く流布させるのに力のあったことを明らかにし、「共感関係」のあらわれとして成り立つ美術市場の裾野を拡大したことを**跡づける。

(3)共感・スペクタクル・美術市場の連関関係を知る上で、看過できないのがヒエロニムス・ボッス作品のコピーやそれを発想源とした大量の版画作品である。この「メディア」は、ブリュゲル作品の版画ともども「ネーデルラントらしさ」という感性の形成にも大きな力があった。この現象を説明することは、**イメージが象徴性よりも感性的な機能によって大きな力を持っていたことを示す証左**となる。

(4)レンブラントの「情念」を軸に据えた「共感表現」は、《復活》《埋葬》を完成するに際して「もっとも偉大でもっとも自然な感情」を表現しようと腐心したというレンブラントの言葉にも表されている。こうした姿勢は、これまで制作者としての姿勢と解されてきたが、実は、鑑賞者との共感関係こそが絵画の成否にかかわる、というレンブラントの信念の表明でもある。共感表現をスペクタクルにふさわしく仕上げ、市場にも訴えかける戦略であり、晩年の《クラウディウス・キウィリスの謀議》を中心に検討したい。

(5)レンブラント美術もとよりネーデルラント美術は、感覚の変遷、モードの変化こそが第一義的だという姿勢に貫かれている。いわば**本質と属性の逆転に特徴があり、近代に先駆けている**。この点については、静物画を中心に検討を加えたい。

#### 4. 研究成果

研究目的の中で列記した4点を中心に研究成果をまとめることができる。

(1)すでに15世紀のネーデルラント美術、とくにヤン・ファン・エイクの美術において象徴性や図像的な意味内容と並行して、聖書に語られない人物の動作や場面を描きこみ、**観るものの情念をかきたてる感性的表現がファン・エイク以来、重要なファクターとして絵画の中で機能していたことが明らかになった**。たとえば、ファン・エイクの《ヘントの祭壇画》(図 )を見てみよう。そこに描かれたのは、まぎれもなく宗教世界である。神を言祝ぐさまざまな場面が展開されている。しかし、私たちの目をとらえて離さないのは、圧倒的なリアリズムで描写された人物の顔や衣裳、宝石、書物などの事物、それに風景のディテールである。絵を前にした鑑賞者は、自分をとらえて離さない美が神の世界の影、すなわちたんなる仮象としてではなく、まさしくそれこそが**真実だと感じているのだ**。この地上の世界

こそが神の世界であるという意識が目覚めるのである。ネーデルラント絵画は見るものの視覚を通して、この世界の豊饒さを開示してくれるのである。逆にいえば、見るものがこの美に魅了されなければ、世界は隠されたままなのである。

(2) 聖なるものと俗なるものが表裏として作成され、スペクタクルを發揮したのは、ボッスに顕著に見られた。「四方の風」という版画工房を構えたヒエロニムス・コックの目玉商品の一つが、ヒエロニムス・ボッスの作品やその断片、あるいはボッスマがいの素描をたくさん版画にしたものである。ボッスの芸術的な遺産を活用しながら新しい作品を創りだし、いわゆる「ボッス・ブランド」を創りだしていった。それが市場から支持されることで16世紀後半から17世紀にまで広範に浸透していくことになった

(3) 鑑賞者と絵画との相互関係からスペクタクルを生みだすのがレンブラント芸術の特徴である。レンブラントの「受難連作」(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク)では、宗教的なテーマであっても、絵画を図像内容にからではなく、鑑賞者が反復して見たくくなるような仕掛けがほどこされている。この感性の仕掛けは、視線の遊戯と感性の戯れとでも表現できる特徴で、17世紀ネーデルラントにおいて1世を風靡した画廊画と共通性があることを明らかにした。

(4) 研究目的の(4)レンブラントの「名声の戦略」と(5)「名声の自己増殖」については、彼の晩年の大作《クラウディウス・キウィリスの謀議》(ストックホルム国立絵画館)を検討することから、驚くべき特徴が解明された。レンブラントはスキャンダルを価値ととらえていた節がある。人が看過していくところに価値を発見し、それを意味づけることで芸術的創造と評価したり、美術商であればそれを値段に反映させたりする。レンブラントという芸術家は、委嘱者と悶着を起こすことで、自己の芸術がもつインパクトを推しはかり、そのトラブルさえも独創性の証にするというものだ。レンブラントと顧客との関係は、ときに理解しがたいものがある。値段でしばしば衝突し、また借金をしてくり返し悶着を起こした。そのため多くは去っている。破産によってレンブラントは多くの債権者に多大な損害を与えている。普通であれば、アムステルダム社会から追放されてしかるべきだ。にもかかわらず破産後も、市庁舎の注文をはじめレンブラントは依然として重要な仕事にかかわりつづけた。スキャンダルはレンブラントにとっては習慣を逸脱し、独創的であることの証でもあった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 尾崎彰宏	4. 巻 33
2. 論文標題 Junko Aono, Confronting the Golden Age (書評)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 デ・アルテ	6. 最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎彰宏	4. 巻 1巻
2. 論文標題 ベラスケスとレンブラント 粗描きにみる絵画論	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ベラスケスとバロック絵画：影響と同時代性、重要と遺産（公開国際シンポジウム報告集）	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎彰宏	4. 巻 19号
2. 論文標題 ヒエロニムス・ボッスの革新とそのリバイバル：美術市場が創る新しい感性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『西洋美術研究』	6. 最初と最後の頁 175-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 Transcultural Art Production of Urban Space in Amsterdam: Rembrandt Encounter with Asia
3. 学会等名 Rescaling Eurasian Cities: Cities as Places of Contact and Change (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 Porcelain's White Gleam : Iconoclasm and Encounter between the Netherlands and Asia &raquo;
3. 学会等名 International Workshop : Les Valeurs de l'Autre, 7-8 March, University Grenoble Alpes(France) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 After 3.11: Toward a Rehabilitation of the Mind
3. 学会等名 International Symposium "3.11: Disaster and Trauma in Experience, Understanding, and Imagination" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 Porcelain's White Gleam : Iconoclasm and Encounter between the Netherlands and Asia
3. 学会等名 International Workshop: Emotion and Feeling in Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 The Beginning of the Never-ending Struggle
3. 学会等名 Tohoku Forum for Creativity (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Akihiro Ozaki
2. 発表標題 Rembrandt's Aesthetic Technology: The Range of Pictorialization of Emotions in the Passion Series(Alte Pinakothek, Munich)
3. 学会等名 HekksaG0n: Network of Universities (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Akihiro Ozaki (Chr. Craig, E. Fongro, A. Niehaus,eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Mimesis (Milan)	5. 総ページ数 181pp.
3. 書名 3.11: Disaster and Trauma in Experience, Understanding, and Imagination	

1. 著者名 尾崎彰宏 (幸福輝 編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 466pp
3. 書名 一七世紀オランダ美術と アジア	

1. 著者名 Christopher Craig, Enrico Fongaro, Akihiro Ozaki (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mimesis international (Milan)	5. 総ページ数 153
3. 書名 Knowledge and Arts on the Move: Transformation of the Self-aware Image through East-West Encounters	

1. 著者名 尾崎彰宏他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 ネーデルラント美術の光輝：ロベール・カンパンからレンブラント、そしてヘリット・ダウ	

1. 著者名 Akihiro Ozaki and others	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Mimesis	5. 総ページ数 323
3. 書名 How to Learn? Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ヘクサゴン：ドイツと日本の大学間ネットワーク  <a href="https://www.hekksagon.net/">https://www.hekksagon.net/</a></p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考